延書本『選択本願念仏集』の表記法

――「オ」と「ヲ」の表記をめぐって――

武久康高

一　はじめに

『選択本願念仏集』は、建久九年（一一九八）、法然によって撰述された。現存する主要な古写本には、和化漢文体で記された漢文訓点本と漢字仮名交じりの延書本とがある。

前者（漢文訓点本）としては、法然の直筆を残すといわれる廬山寺蔵本（鎌倉初期写本、鎌倉初期点）をはじめとして、当麻往生院蔵本（一二〇四年写本、一二〇四年頃点・鎌倉後期点）、京都法然院蔵本（延応元年（一二三九）刊本、鎌倉中期～江戸期点）、東洋文庫蔵本（上巻…延応刊本、鎌倉中期点（江戸期点もあり）、下巻…建長三年版本、弘安九年点（江戸期点もあり））などが現存している。

また、後者（延書本）としては、専修寺蔵本（下本・下末…正安四年（一三〇二）写本）、龍谷大学蔵本（本上・本中・本下・末上…南北朝期写本）、大谷大学蔵本（上本…室町時代初期写本）などがある。このうち、専修寺蔵本と大谷大学蔵本には「愚禿親鸞〈八十七歳〉」の本奥書が確認でき、両写本が用いた底本も親鸞筆であると考えられる。

以上のような古写本の現存状況のなか、本稿では、延書本『選択本願念仏集』、とくに現存する最古の延書本である専修寺蔵本と次に古い龍谷大学蔵本の特徴の一端について、両本の比較、および同書の漢文訓点本との比較を通じて明らかにすることを目的とする。

二　延書本二本の比較・特徴

二―一　延書本二本の本文比較　―相違点の確認―

ここでは、専修寺蔵本と龍谷大学蔵本の共通本文部分について比較する。その際、まず、該当箇所の一部を実際に掲げることによって相違点を確認し、それをもとに両本全体について調査することとする。なお、専修寺蔵本は『影印高田古典 第二巻 顕智上人 上』（真宗高田派宗務院、一九九九・四）所収の写真版、龍谷大学蔵本は広島大学蔵の写真版に依る。

【専修寺蔵本】

351.1 選択本願念佛集〈仮字下本〉

351.2 『八』〇〇〇 念佛ノ行者・カナラス・三心ヲ・具足スヘキ文・

351.3 ●● 観无量寿経ニ・ノタマハク・モシ・衆生アリテ・

351.4 カノクニ、・ムマレムト・ネカハムモノハ・三種ノ心ヲ・

351.5 オコシテ・スナワチ・往生ス・ナムラオカ・三トスル・一ニハ・

351.6 至誠心・二ニハ・深心・三ニハ・廻向発願心ナリ・

352.1 三心ヲ具スレハ・カナラス・カノクニ、生ス・同 経ノ

352.2 疏ニ・イハク・一ニハ・至誠心・至ハ真ナリ・誠ハ実

352.3 ナリ・一切衆生ノ・身口意業ノ・所修ノ解

352.4 行・カナラス・真実心ノ中ニ・ナシタマヘルヲ・モチ

352.5 キルコトヲ・アカサムト・オモフ・ホカニハ・賢―善精―

352.6 進ノ相ヲ・現スルコトヲ・エサレ・ウチニ・虚仮ヲ・

353.1 イタケレハナリ

【龍谷大学蔵本】

001.1 念佛ノ行者 カナラス 三心ヲ 具

001.2 足スヘキ 文

001.3 観无量壽経ニ ノタマハク モシ衆

001.4 生アリテ カノ クニ、 生セント 願ス

001.5 レハ 三種ノ心ヲ オコシテ スナハチ

002.1 往生ス ナニラヲカ ミツトスル ヒトツニハ

002.2 至誠心 フタツニハ 深心 ミツニハ 廻向發

002.3 願心ナリ 三心ヲ 具スルモノハ カナ

002.4 ラス カノ クニ、 生ス 〈已上〉

002.5 観経義ニ イハク 経ニ ノタマハク ヒト

003.1 ツニハ 至誠心 至ト イフハ 真ナリ

003.2 誠ト イフハ 実ナリ 一切衆生ノ身

003.3 口意業ノ所修ノ解行 カナラス 真

003.4 実心中ニ ナシタマヒヲ モチキン

003.5 コトヲ アカサント 欲ス ホカニ 賢善

004.1 精 進ノ相ヲ 現スルコトヲ エサレ ウチニ

004.2 虚仮ヲ イタケレハナリ

引用箇所における両本の違いを表にしめすと、以下のようになる。

専修寺蔵本	龍谷大学蔵本	相違点
ムマレムト	生セント	訓読み〈専〉と音読み〈龍〉
		m韻尾〈専〉とn韻尾〈龍〉
ネカハムモノハ	願スレハ	訓読み〈専〉と音読み〈龍〉
		訓読の仕方の差異
スナワチ	スナハチ	ワ〈専〉とハ〈龍〉
ナムラオカ	ナニラヲカ	m韻尾〈専〉とn韻尾〈龍〉
		オ〈専〉とヲ〈龍〉
三トスル	ミツトスル	漢字〈専〉と片仮名表記〈龍〉

一ニハ	ヒトツニハ	漢字〈専〉と片仮名表記〈龍〉	
二ニハ	フタツニハ	漢字〈専〉と片仮名表記〈龍〉	
シムシム	シンシム	m韻尾〈専〉とn韻尾〈龍〉	
三ニハ	ミツニハ	漢字〈専〉と片仮名表記〈龍〉	
具スレハ	具スルモノハ	訓読の仕方の差異	
一ニハ	ヒトツニハ	漢字〈専〉と片仮名表記〈龍〉	
至ハ	至トイフハ	訓読の仕方の差異	
誠ハ	誠トイフハ	訓読の仕方の差異	
真実心ノ中ニ	真実心中ニ	助詞（ノ）の有〈専〉無〈龍〉	
ナシタマヘルヲ	ナシタマヒシヲ	訓読の仕方の差異	
モトキル	モチキン	m韻尾〈専〉とn韻尾〈龍〉	
アカサム	アカサン	m韻尾〈専〉とn韻尾〈龍〉	
オモフ	欲ス	訓読み〈専〉と音読み〈龍〉	
ホカニハ	ホカニ	助詞（ハ）の有〈専〉無〈龍〉	
賢―善精―進	賢善精進	合符の有〈専〉無〈龍〉	

※振り仮名の有無、依拠本文の相違と考えられる箇所（「同（オナシキヤウ）経ノ疏（シヨ）ニ・イハク」〈専〉、「観経（クワンキヤウキ）義ニ　イハク　経（キヤウ）ニ　ノタマハク」〈龍〉）は除く。

これらの相違点のうち、両本の仮名音注（m・n韻尾など）の相違については、すでに佐々木勇氏による指摘がある。[注1] そこでは、「両者の仮名音注（専修寺本二〇九九、龍谷大学本二八六五）は、大部分一致」するものの、その相違点として「専修寺本は、底本であった親鸞書写本の表記をとどめた点が多」く、一方で「龍谷本は、南北朝期の音韻を反映する表記法・当時の一般の表記法が見られ」ることが述べられている。つまり、専修寺蔵本のほうが底本である親鸞の表記法をとどめているとする見解だが、こうした特徴は、「ナムラオ|カ」（専修寺蔵本）「ナニラヲ|カ」（龍谷大学蔵本）のような「オ」と「ヲ」の表記の違いからも確認することができる。

親鸞の独特な仮名づかいのひとつに「ヲ」の仮名づかいがあることについては、すでに先学による指摘がある。たとえば吉沢義則氏は「弖爾乎波のヲ辭が單獨に用ひられる時には、ヲ文字で書かれてあるが、其れがモバヤなどと複合してヲモヲバヲヤなどいふ形で用ひられる時には、オ文字で書かれて、オモオバオヤなどとなつてゐる事」[注2]、また小林芳規氏は「助詞『ヲ』が単独に用いられる際には『ヲ』、二音節以上から成る単語（複合助詞を含めて）の第一音節には『オ』を用いる傾向が多かった」ことを指摘している。[注3] さらに金子彰氏は「語頭『オ』の仮名づかいが、各遺文共通に、明確なもの」であることから、「複合助詞『オハ・オモ・オヤ・オカ』について、一語意識が強かったのであろう」と論じている。[注4] こうした先学の指摘にしたがえば、専修寺蔵本の「オカ」の表記も親鸞の仮名づかいに基づきなされたものではないかと推測することができる。なお、この専修寺蔵本の複合助詞と親鸞の仮名づかいとの一致については、すでに佐々木氏が前掲論文の注で指摘している。だが、そこでは指摘のみで、実際にその具体を明らかにしているわけではない。よって、以下、両本の「オ」と「ヲ」の表記の差異に注目して調査を進めることとする。

二―二 「オ」と「ヲ」の使い分け

二―二―一 本文が共通する箇所における比較

専修寺蔵本と龍谷大学蔵本とは本文が共通する部分がある。まず、この共通する部分について比較をおこなう。

A、共通点

①「ヲ」

・助詞ヲ（〈専〉307、〈龍〉306）

（※読み仮名、割注を含む）

・複合助詞ヲモテ（〈専〉24、〈龍〉22）、ヲシテ（〈専〉3、〈龍〉1）

②「オ」

（※「オ」と「ヲ」以外で両者の読み方が異なる場合、専修〈龍谷〉（例　オム〈オン〉）のように表記した。）

・応（オウ）、憶・億（オク）、發・起（オコス）、起（オコル）、恐（オソラクハ）、畏・恐・怖・惶（オソル）、落・堕（オツ）、同（オナシ）、多（オホシ）、覆（オホフ）、凡（オホヨソ〈オヨソ・オホヨス〉）、音・陰・御・恩（オム〈オン〉）、想・欲・念（オモフ・オモヒ）、慮（オモムハカル〈オモンハカル〉）

B、相違点

①専修寺蔵本で「オ」と読み、龍谷大学蔵本で「ヲ」と読むもの

（※（専修・龍谷）のように表記した。）

・於（オイテ・ヲイテ）、置（オク・ヲク）、教（オシユ・ヲシフ）、各（各）（オノオノ・ヲノヲノ）、己（オノレ・ヲノレ）、已（オハル・ヲハル）、及（オヨヒ・ヲヨヒ）、及（オヨフ・ヲヨフ）、遠（トオ|サカル・トヲ|サカル）

・複合助詞（オカ・ヲカ）、複合助詞（オハ・ヲハ）

②専修寺蔵本で「オ」と読み、龍谷大学蔵本に読みがないもの

・仰（アオ|イテ）、濕（ウルオ|ス）、摂（オサム）、摂受（オサメトル）、推（オス）、驚（オトロク）、畢（オハル）、已（オフ）、大（オホキナリ）、衆（オホシ）、重（オモシ）、競（キオ|ヒ）、不調（トトノオ|ラサル）、焔（ホノオ|）

③龍谷大学蔵本で「ヲ」と読み、専修寺蔵本に読みがないもの

・由（ナヲ|・ナヲ|シ）、犯（ヲカス）、畢（ヲフ）、節（ヲリフシ）、

※重（ヲモクス〈オモクスもあり〉）

・複合助詞（ヲモ）

◆以上の整理から、次のことが指摘できる。

・専修寺蔵本は、助詞「ヲ」および複合助詞「ヲモテ」「ヲシテ」以外、すべて「オ」表記となっていること。

・龍谷大学蔵本では、助詞「ヲ」および「ヲ」を含む複合助詞の表記はすべて「ヲ」表記であり、その他の表記については「オ」と「ヲ」表記が混在していること。

前掲の論文において金子氏は、親鸞の助詞「ヲ」を含む複合助詞の仮名づかいについて調査している。その結果（〈オカ10例―ヲカ1例〉〈オハ171例―ヲハ9例〉〈オモテ1例―ヲモテ28例〉〈オシテ0例―ヲシテ34例[注5]〉を参考にすれば、複合助詞を「オカ」「オハ」および「ヲモテ」「ヲシテ」と表記する専修寺蔵本は親鸞の仮名づ

かいと一致するといえる。また、助詞「ヲ」の表記、あるいは単語の第一音節に「オ」を用いる専修寺蔵本の表記法も、小林氏および金子氏が指摘する親鸞の仮名づかいの特徴と矛盾しない。さらに、専修寺蔵本にみられる語頭以外の「オ」表記についても、親鸞はそれぞれ「アオキ」〈仰〉（『尊号真像銘文』（広本）末三六6、『尊号真像銘文』（略本）九一5）、「トオサカラス」〈遠〉（『尊号真像銘文』（広本）本三三5）などとしている。[注6] これらの点から、「オ」と「ヲ」の表記にかんして専修寺蔵本は、底本である親鸞の仮名づかいにもとづいて書いていると指摘することができる。

一方、龍谷大学蔵本は、先学が明らかにした親鸞の仮名づかいとの関連は薄い。そこで試みに、龍谷大学蔵本の表記を『仮名文字遣』（国会図書館本）と比較してみたい。『仮名文字遣』にかんして、「当時、一般に（この辺の明白な事情は今後の課題だが）平仮名文を表記するに当たり、その「仮名遣に拠っていた節が看取される」とする指摘があるためである。[注7]

A、読み方が一致するもの

※（龍谷大学蔵本・仮名文字遣）のように表記した。

①オ

・憶（オク・おくして）、起（オコス・〈思起〉おもひおこす）、起（オコル・おこる）、畏・怖（オソル・おそる）、落（オツ・おつ）、同（オナジ・〈同事〉おなしこと）、多（オホシ・おほし）、覆（オホフ・おほふ）、凡（オホヨソ・おほよそ）、想・念（オモヒ／オモフ・おもひ／おもふ）、慮（オモンハカル・おもんはかる）、音（オン・〈音聲〉おんしやう）、陰（オン・〈陰陽寮〉おんやうれう）、御（オン・〈御調度〉おんてうと）

〈参考〉發（オコス・おこる）、恐（オソラクハ・おそろし）、恐・惶（オソル・おそろし）

②ヲ

・於（ヲイテ・をいて）、置（ヲク・をく）、教（ヲシフ・をしふ）、各（各）（ヲノヲノ・をのを）、及（ヲヨフ・をよふ）

〈参考〉遠（トヲサカル・〈遠江國〉とをたうみの國）、畢（ヲフ・をはる）、重（ヲモクス・をもし）、及（ヲヨヒ・をよふ）

B、読み方が異なるもの

・恩（オン・〈恩恤〉をんしゆつ）

※已（ヲハル・おはつて。ただし「終・了・畢・訖＝をはる」）、節（ヲリフシ・〈境節・折節〉おりふし）

C、読みがないもの

・応（オウ）、犯（ヲカス）、億（オク）、堕（オツ）、己（ヲノレ）、欲（オモヒ／オモフ）、由（ナヲ／ナヲシ）

◆以上のように、両者の表記法は完全に一致するわけではない。しかし、少なくとも「オ」と「ヲ」にかんする龍谷大学蔵本の表記は、専修寺蔵本（＝親鸞の仮名づかい）よりも『仮名文字遣』に近いと考えられる。ただし両者には、片仮名と平仮名という差異がある。よって、ここでは龍谷大学蔵本の言語位相が「当時」の「一般」の表記法に近いという可能性を示唆するにとどめたい。

二―二―二　本文が共通しない箇所における「オ」と「ヲ」の表記

次に、本文が共通しない範囲で確認される、前掲以外の用例についてしめす。

A、専修寺蔵本

・終（オハル）、重（オモクス）

・複合助詞（オヤ）

◆専修寺蔵本の二例（「オハル」「オモクス」）は二音節以上から成る単語であり、いずれも第一音節が「オ」表記となっている。つまり、前述した親鸞の仮名づかいの特徴と一致する。また、複合助詞「オヤ」についても、金子氏の前掲論文の調査結果（オヤ24例―ヲヤ3例）に従えば、[注8]親鸞の仮名づかいに沿ったものといえる。

B、龍谷大学蔵本

①ヲ

・屋（ヲク）、惜（ヲク）、懈（ヲコタル）、自（ヲノツカラ）、終・畢・竟（ヲハル）、溺（ヲホル）、重（ヲモシ）、及以（ヲヨヒ）、癡（ヲロカナリ）、閣（サシヲ|ク）、十（トヲ|）、遠（トヲ|シ）、徹（トヲ|ス）、仍（ナヲ|）

・複合助詞（ヲモ）、複合助詞（ヲヤ）

②オ

・屋（オク）、摂（オサム）、劣（オトル）、大（オホ・オホキナリ）、思（オモヒ・オモフ）、観（オモフ）、欲（オホス）、惟・以（オモンミル）、踈（オロカナリ）、遠（オン）

◆龍谷大学蔵本は親鸞の仮名づかいの特徴と一致しない。そこで、『仮名文字遣』と比較すると以下のようになる。

①読み方が一致するもの

※（龍谷大学蔵本・仮名文字遣）のように表記した。

・惜（ヲク・をく）、終・畢（ヲハル・をはる）、重（ヲモシ・をもし）、十（トヲ|・とを|）

・大（オホ／オホキナリ・おほ／おほきなり）、思（オモヒ／オモフ・おもひ／おもふ）、惟・以（オモンミル・おもんみる）

※踈（オロカナリ・〈下踈々〉おろ、〉）、及以（ヲヨヒ・〈及〉をよふ）、遠（トヲ|シ・〈遠江國〉とを|たうみの國）

②読み方が一致しないもの

・劣（オトル・をとる）、溺（ヲホル・おほうる）、徹（トヲ|ス・とお|る／とほ|す）

③読みがないもの

・屋（ヲク／オク）、懈（ヲコタル）、摂（オサム）、自（ヲノツカラ）、竟（ヲハル）、観（オモフ）、欲（オホス）、癡（ヲロカナリ）、遠（オン）、閣（サシヲ|ク）、仍（ナヲ|）

◆ここでも両者の表記が一致するとはいえないが、近いとはいえそうである。

二―三　まとめ

以上、専修寺蔵本と龍谷大学蔵本の「オ」と「ヲ」の表記について比較し、次のような結論を得た。

・専修寺蔵本の表記は、親鸞の仮名づかいにもとづき書かれたと考えられること

・龍谷大学蔵本の表記は親鸞の仮名づかいとは異なり、どちらかと

言えば、当時一般の仮名づかいに近いこと

三　訓点本との比較

次に、両者の特徴をより明瞭にするため、同書の漢文訓点本との比較をおこなう。資料は、当麻往生院蔵本、京都法然院蔵本、東洋文庫蔵本を用いる。(注9)

三―一　調査方法と結果

【調査方法】

・それぞれ全巻を調査対象とする。

・時代を異にする、すべての訓点について調査する。

【調査結果】

・すべての訓点が「ヲ」表記で統一されていた。つまり、漢文訓点本では漢文の訓読や漢字の読みをしるすにあたって、「オ」表記が全くなされていなかった。

以下、調査結果の一部として、専修寺蔵本・龍谷大学蔵本で検討した漢字の読み、および（複合）助詞について、右記の漢文訓点本の訓読を載せる。なお、当麻往生院蔵本を〈往〉、京都法然院蔵本を〈延〉、東洋文庫蔵本を〈東〉と表記した。

A、両延書本と漢文訓点本の表記が共通する例

・助詞「ヲ」、複合助詞「ヲシテ」、複合助詞「ヲモテ」

◆すべての資料に共通する表記は、この三例のみである。

B、両延書本と漢文訓点本の表記が相違する例

B―1、漢文訓点本の表記と龍谷大学蔵本のみが共通（専修寺蔵本と相違、あるいは表記なし）

①専修寺蔵本と漢文訓点本との表記が異なる

◇オカ（専・オカ、龍・ヲカ）…〈往〉ヲカ・〈延〉ヲカ・〈東〉ヲカ、◇ヲハ（専・オハ、龍・ヲハ）…〈往〉ヲハ・〈延〉ヲハ・〈東〉ヲハ、◇ヲヤ（専・オヤ、龍・ヲヤ）…〈往〉ヲヤ・〈延〉ヲヤ・〈東〉ヲヤ

◇於（専・オイテ、龍・ヲイテ）…〈往〉ヲイテ・〈延〉―・〈東〉ヲイテ、◇置（専・オク、龍・ヲク）…〈往〉ヲク・〈延〉ヲク・〈東〉ヲク、◇教（専・オシユ、龍・ヲシフ）…〈往〉ヲシフ・〈延〉ヲシフ・〈東〉ヲシフ、◇各（専・オノオノ、龍・ヲノヲノ）…〈往〉ヲノヲノ・〈延〉―・〈東〉―、◇己（専・オノレ、龍・ヲノレ）…〈往〉ヲノレ・〈延〉ヲノレ・〈東〉ヲノレ、◇終（専・オハル、龍・ヲハル）…〈往〉ヲハル・〈延〉―・〈東〉ヲハル、◇已（専・オハル、龍・ヲハル）…〈往〉ヲハル・〈延〉―・〈東〉ヲハル、◇畢（専・オハル、龍・ヲハル）…〈往〉ヲハル・〈延〉―・〈東〉―、◇及（専・オヨヒ、龍・ヲヨヒ）…〈往〉ヲヨヒ・〈延〉―・〈東〉―、◇及（専・オヨフ、龍・ヲヨフ）…〈往〉ヲヨフ・〈延〉―・〈東〉―、◇遠（専・トオサカル、龍・トヲサカル）…〈往〉トヲサカル・〈延〉トヲサカル・〈東〉トヲサカル

②専修寺蔵本に表記なし

◇ヲモ…〈往〉ヲモ・〈延〉ヲモ・〈東〉―

◇屋（龍・オ（ヲ）ク）…〈往〉ヲク・〈延〉ヲク・〈東〉ヲク、◇

惜（龍・ヲク）…〈往〉ヲク・〈延〉―・〈東〉ヲク、◇竟（龍・ヲハル）…〈往〉―・〈延〉ヲハル・〈東〉―、◇畢（龍・ヲフ）…〈往〉ヲフ・〈延〉ヲフ・〈東〉ヲフ、◇溺（龍・ヲホル）…〈往〉ヲホル・〈延〉ヲホル・〈東〉ヲホル、◇癡（龍・ヲロカナリ）…〈往〉ヲロカナリ・〈延〉―・〈東〉ヲロカナリ、◇閣（龍・サシヲク）…〈往〉サシヲク・〈延〉○○ヲク・〈東〉サシヲク、◇遠（龍・トヲシ）…〈往〉トヲシ・〈延〉トヲシ・〈東〉○ヲシ、◇徹（龍・トヲス）…〈往〉トヲス・〈延〉○ヲス・〈東〉―、◇仍（龍・ナヲ）…〈往〉ナヲ・〈延〉ナヲ・〈東〉ナヲ、◇由（龍・ナヲ）…〈往〉ナヲ・〈延〉ナヲ・〈東〉ナヲ、◇由（龍・ナヲシ）…〈往〉ナヲシ・〈延〉ナヲシ・〈東〉ナヲシ

B―2、漢文訓点本と延書本の表記が全く相違

①両延書本共通の表記

（※原漢文が一致しない箇所での同じ表記も含む。）

◇応（オウ）…〈往〉ヲウ・〈延〉―・〈東〉―、◇憶（オク）…〈往〉ヲク・〈延〉―・〈東〉―、◇發（オコス）…〈往〉ヲコス・〈延〉―・〈東〉ヲコス、◇起（オコス）…〈往〉ヲコス・〈延〉―・〈岩〉―、◇摂（オサム）…〈往〉ヲサム・〈延〉ヲサム・〈東〉―、◇恐（オソラク）…〈往〉ヲソラク・〈延〉―・〈東〉ヲソラク、◇恐畏（オソル）…〈往〉ヲソル・〈延〉ヲソル、〈東〉―、◇畏（オソル）…〈往〉ヲソル・〈延〉ヲソル・〈東〉ヲソル、◇惶怖（オソル）…〈往〉ヲソル・〈延〉―・〈東〉―、◇落（オツ）…〈往〉ヲツ・〈延〉―・〈東〉―、◇墮（オツ）…〈往〉ヲツ・〈延〉―・〈東〉―、◇大（オホキナリ）…〈往〉ヲ、キ・〈延〉―・〈東〉―、◇多（オホシ）…〈往〉ヲ、シ・〈延〉―・〈東〉―、◇覆（オホフ）…〈往〉ヲ、フ（ウ）・〈延〉ヲ、（ホ）フ・〈東〉ヲ、フ、◇凡（オ（ホ）ヨソ）…〈往〉ヲヨソ・〈延〉―・〈東〉―、◇音（オム（ン））…〈往〉ヲム・〈延〉ヲン・〈東〉―、◇陰（オム（オン））…〈往〉ヲム・〈延〉―・〈東〉ヲン、◇恩（オム（オン））…〈往〉ヲン・〈延〉―・〈東〉―、◇重（専・オモクス、龍・オ（ヲ）モクス）…〈往〉ヲモクス・〈延〉―・〈東〉―、◇重（専・オモシ、龍・ヲモシ）…〈往〉ヲモシ・〈延〉―・〈東〉―、◇想（オモフ）…〈往〉ヲモフ・〈延〉―・〈東〉―、◇欲（オモフ）…〈往〉ヲモフ・〈延〉―・〈東〉―、◇念（オモフ）…〈往〉ヲモフ・〈延〉―・〈東〉―、◇慮（オモム（ン）ハカル）…〈往〉ヲモンハカル・〈延〉ウラヲモヒ・〈東〉ヲモハカリ

②専修寺蔵本と相違（龍谷大学蔵本には表記なし）

◇仰（専・アオク）…〈往〉アヲク・〈延〉―・〈東〉アヲク、◇濕（専・ウルオス）…〈往〉ウルヲス・〈延〉○○ヲス・〈東〉ウルヲス、◇推（専・オス）…〈往〉―・〈延〉―・〈東〉―、◇驚（専・オトロク）…〈往〉ヲトロク・〈延〉―・〈東〉―、◇競（専・キオヒ）…〈往〉キヲヒ・〈延〉○ヲイ（ヒ）・〈東〉キヲヒ、◇不調（専・トトノオラサル）…〈往〉ト、ノヲウ・〈延〉○○ヲル・〈東〉―、◇焔（専・ホノオ）…〈往〉ホノヲ・〈延〉ホノヲ・〈東〉―

③龍谷大学蔵本と相違（専修寺蔵本には表記なし）

◇思（龍・オモフ）…〈往〉ヲモフ・〈延〉―・〈東〉―、◇惟（龍・

オモンミル）…〈往〉ヲモミル・〈延〉―・〈東〉ヲモンミル、◇以（龍・オモンミル）…〈往〉ヲモンミル・〈延〉―・〈東〉―、◇踈（龍・オロカナリ）…〈往〉ヲロカナリ・〈延〉―・〈東〉―、◇遠（龍・オン）…〈往〉ヲン・〈延〉―・〈東〉―

C、漢文訓点本に表記なし

・億（オク）、起（オコル）、怖（オソル）、同（オナジ）、御（オム（オン））、犯（龍・ヲカス）、懈（龍・ヲコタル）、劣（龍・オトル）、自（龍・ヲノツカラ）、欲（龍・オホス）、思（龍・オモヒ）、観（龍・オモフ）、節（龍・ヲリフシ）、十（龍・トヲ）

三―二　まとめ

漢文訓点本はすべて「ヲ」表記で統一されていた。よって、専修寺蔵本の表記との重なりは助詞「ヲ」、複合助詞「ヲシテ」「ヲモテ」のみである。また、龍谷大学蔵本とも相違点が多い。ここから、両延書本は漢文訓点本の表記にもとづき書かれたものではないと指摘できる。

四　結　論　―両延書本の特徴―

以上、本稿では延書本『選択本願念仏集』のうち、専修寺蔵本と龍谷大学蔵本の特徴について、「オ」と「ヲ」の表記の差異に注目して検討してきた。結果として次のことが明らかになった。

・両延書本は、現存する漢文訓点本の表記にもとづき書かれたものではないこと

・専修寺蔵本の表記は、親鸞の仮名づかいにもとづき書かれたと考えられること

・龍谷大学蔵本の表記は親鸞の表記法とは異なり、どちらかと言えば、当時一般の仮名づかいに近いこと

注

注1　佐々木勇「鎌倉時代における『選択本願念仏集』訓点本と仮名書き本の漢字音 ―仮名書き本に見られる親鸞の仮名遣い―」（『国語と国文学』二〇〇二・七）

注2　吉沢義則「親鸞上人の寫語法」（『龍谷大学論叢』一九二二・一一）

注3　小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」（『東洋大学大学院紀要』一九六五）

注4　金子彰「親鸞の仮名づかい」（『国文学攷』一九七八・一）

注5　注4金子論文。それぞれの用例の内訳は次のとおり。

オカ10……浄土論註2、西方指南抄8。

ヲカ1……浄土論註1。

オハ171……唯信抄（平仮名本）4、浄土和讃6、浄土高僧和讃20、唯信抄（西本願寺本）8、尊号真像銘文（略本）2、浄土論註2、西方指南抄101、唯信抄文意（正月十一日本）7、一念多念文意13、正像末法和讃2、尊号真像銘文（広本）6。

ヲハ9……西方指南抄4、書簡（八）1、書簡（九）2、書簡

（十）2。

オモテ1…西方指南抄1。

ヲモテ28…尊号真像銘文（略本）3、書簡（三）1、西方指南抄20、尊号真像銘文（広本）4。

オシテ0。

ヲシテ34…尊号真像銘文（略本）1、浄土論註25、西方指南抄5、唯信抄文意（正月十一日本）2、尊号真像銘文（広本）1。

注6　それぞれ『親鸞聖人真蹟集成　第四巻』（法蔵館、一九七四・一一）に依る。なお、「トオシ」という表記は、『唯信抄』西本願寺本（トオク七2、トオキ九4・四七2）、『唯信抄文意』専修寺正月十一日本（トオキ九六1）などに確認できる（『親鸞聖人真蹟集成　第八巻』法蔵館、一九七四・四）。

注7　大友信一「解題」（駒沢大学国語研究　資料第二『仮名文字遣』汲古書院、一九八〇・六）

注8　注4金子論文。オヤ・ヲヤの内訳は次のとおり。

オヤ24…唯信抄（平仮名本）3、唯信抄（西本願寺本）2、西方指南抄19。

ヲヤ3…浄土論註2、西方指南抄1。

注9　調査はそれぞれ、当麻往生院蔵本（法蔵館、一九八〇・一一）、京都法然院蔵本（法蔵館、一九八〇・一一）、東洋文庫蔵本（佐々木氏から借用した原本からの移点本）に依った。

※本論文は平成十三年度本学大学院の演習発表資料（「国語文化学特論Ⅲ」佐々木勇先生）をもとに執筆したものである。

（淡江大学）